

聖書:ホセア書13章1～16節

説教:死から彼らを贖う

はじめに

いま国会でも熊対策が取り上げられるほど問題になっています。私もいろんな方から「先生のところは大丈夫ですか」と声かけられ心配していただいています。そんなときに、8節の「子を奪われた雌熊のように彼らに襲いかかり」というのが出てくると、ふだん以上に現実感があるので落ち着きません。それに加えて16節には「幼子たちは八つ裂きにされ、妊婦たちは切り裂かれる」とあります。これをどう受けとめたらよいのか、とまどつてしまいます。なぜ神はこのようにことを語るのか。このような厳しことばのなかのどこに救いがあるのか。ともに見てまいります。

1 かき裂く、切り裂く

1) 胸の中にある心を(8節)

そこでまず8節と16節に出てくる「かき裂く」と「切り裂く」から考えていきます。8節。「子を奪われた雌熊のように彼らに襲いかかり、彼らの胸をかき裂いて、その場で雌獅子のように食らう。野の獣は彼らを引き裂く。」子連れの熊がどんなに危険であるかはみなさんもご存じのとおりです。それが子を奪われた熊というのですから、どれほど危ないか。そんな熊が「胸をかき裂く」とあります。ここをもう少し詳しく訳し直すと「彼らの胸の中にある心をかき裂く」となります。からだを裂くだけではなく、心もかき裂いていく。どうして心ということばが出て来るのか。そのことはまた後で触れることにしましょう。

2) 妊婦たちを(16節)

続いて16節を読みます。「サマリアは咎ある者となる。自分の神に逆らったからだ。彼らは剣に倒れ、幼子たちは八つ裂きにされ、妊婦たちは切り裂かれる。」

かつて日本軍もこのようなことをしたし、今もこのようなことが行われていると言われます。これを読んで、ある方はこんな質問をされます。神が本当におられるというのなら、このような恐ろしいことを止めるべきではないのか。神はいない。いたとしても神は私たちのことに関心がないのだろう。

結論から述べると、神は無関心なのではない。むしろ大いに関心がある。関心があるからこそ、

私たちに神のことばである聖書を与えてくださったわけです。ではそれなのにどうしてこんなことになるのか。神が悪いわけではありません。16節にあるように「自分の神に逆らった」からです。イスラエルを守り育ててきた本当の神を捨てて、バアルと呼ばれるほかの神々を拝んでいった結果、こんなことになった。

2 どのようにして逆らうことになったのか

1) 欺きの秤

そこで一つの疑問が出てくる。聖書の神を信じるのと、バアルの神々を信じるのと何が違うのか。信仰の自由というものがあるのだから、どの神を信じて同じではないのか。残念ながらそうはいきません。なぜか。エフライム(北イスラエル)が聖書の神を捨てて、バアルと呼ばれる神々を拝んだ結果、どうなったか。そのことを見るとよくわかる。前回開きました12章7節にこうあった。「商人は手に欺きの秤を持ち、虐げることを好む。」みなさんの家の台所で使う秤はほとんど電子式だと思います。ここで言う秤は、学校の理科室に置いてあるような形をしている。片方の皿に分銅を載せ、もう片方に測りたいものを載せ、左右のバランスをとる。そうやって重さをはかる機械です。大切なのは分銅の重さです。たとえば90グラムしかない分銅を作って、これは100グラムの分銅だとしたらどうなるか、わかりますね。スーパーで肉を買うときに目を皿のようにして重さを確かめます。その重さが嘘だったらどうなるか。中身が90グラムしかないのに、100グラムあると言って商品を売るので、これは大問題です。そんなことは許されない。もちろん、神も最初から正しい天秤を使いなさいと命じていました。しかしバアルの神を拝むようになると、真理を守ることは軽く見られるようになり、自分だけが大切でほかの人がどうなるうともかまわない、秤を偽って富を蓄えていく、そんな世界に変わり果ててしまいました。これがバアルを拝んだ結果です。

2) 満腹したとき、心は高ぶり、神を忘れた

もちろん最初からそうだったのではない。1節前半にこうあります。「エフライムは震えながら語ったとき、イスラエルの中であがめられた。」かつてイスラエルにまだ王が立てられていなかったと

き、十二部族の一つであるエフライムが、謙遜さをもちながらリーダーの役を果たしていたことがありました。ところがそれが大きく変わってしまいます。6節。「しかし牧草で満腹したとき、彼らは満ち足り、心は高ぶり、そうしてわたしを忘れた。」荒野をさまよっていて食べるものに事欠いていたとき、イスラエルは主を忘れることはなかった。ところがカナンの地に入り、やがて国が大きくなって栄えていくと、好きなものを食べられるようになった。そのときから心が高ぶり、神である主を忘れてしまった。ただ忘れたのではなく、うるさいことを言わなくて、自分にとって都合のよい神々を連れてきて、拝むようになる。このようにして心を高ぶらせていきました。

3 イエス・キリスト

1) 心を引き裂く：死んだ者たち

心が高ぶった者はどうなるのでしょうか。先ほど見たとおりです。「わたしは彼らの獅子のようになり、子を奪われた雌熊のように彼らに襲いかかり、彼の胸をかき裂く。」まるで神ご自身が雌熊のように暴れたかのように書いてありますが、実際にこれを行ったのはアッシリアです。北イスラエルが滅びたのは、人々が心を高ぶらせて主に背き、人を欺き、人を虐げ、真理を外れて偽りの道を歩んだから。

そのとき雌熊は彼らの胸の中にある心を引き裂いた、そんなふうに書かれていると言いました。つまりこういうことです。あなたがたの心の中には何があるのか。隠しているから大丈夫ではない。主はあなたがたの胸の中にある心を引き裂いて表に出し、光にさらす。そこになにがあるかよく見なさい。もし高ぶりがあるならば、それが罪と呼ばれるものであり、その罪があなたがたに死をもたらしているのだ。

2) 贖い出す：生きる者たち

北イスラエルの人たちは、こんなふう to 心の中で考えていました。「宝物倉も沢山建てるくらい財産を築くことができたのは、バアルの神々のおかげである。もし自分に罪があるならこんな富を蓄えることはできなかっただろう。自分には罪がない。」しかしそんなふう to のんきに構えていたときに、アッシリアの剣が襲って来ました。宝物倉が略奪されたとき、バアルはなんの力にもならない。王も政府の役人もまったく頼りにならない。昨日まで信じていたものががらがらと音を立って崩れ去ってしまいました。すべてを失ったと

き、人々は初めて救い主はどこにいるのかと探し始めました。しかしときすでに遅いです。人々は剣で倒されてしまいます。これが北イスラエルに起きた出来事です。

ふつうなら、心の高ぶった者の最期はこのとおりになる。そんな教訓で終わりです。しかし聖書はここで終わらない。この続きを語り出すのです。14節。「わたしはよみの力から彼らを贖い出し、死から彼らを贖う。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。」自分は間違っていたと気づいても、そこで死んでしまったならもう手遅れ。一つの国が減んでしまったら、その続きはないのです。もうどうすることもできない。それが世の常識です。しかし神はこう言われるのです。「わたしはよみの力から彼らを贖い出し、死から彼らを贖う。」たといのちをなくすことがあっても神にとって手遅れということはない。神は死んだ者を贖いだしてくださる。そのように約束されます。

3) 本当の助け手

いったいどのようにしてでしょうか。パウロは第一コリント15章56,57節でこう言っています。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」

イエス・キリストは私たちの罪を背負われました。ご自分のからだを裂いて私たちに分け与え、十字架で死んでくださいました。そして三日目に墓の穴からよみがえられ、死にも打ち勝たれました。この方を信じる時、私たちも同じように死に打ち勝つ者となります。それが約束です。この方には手遅れとか、もう遅すぎるということはない。この方こそが私たちの本当の救い主、助け手なのだということです。

北イスラエルのことから教えられます。これほどの素晴らしい約束をいただいているのに、私たちの心になにが忍び込んでくるかです。牧草で満腹している。それは素晴らしいことです。感謝してよい。けれども問題なのは、「私は大丈夫だ」と思うようになり、「私の罪は大したことではない」と思いはじめていくこと。そうして気がつかないうちに主から離れて、心が高ぶることがあるのです。だから、私たちの本当の助け主、本当の助け手である方から目を離したくありません。どうしたらよいのでしょうか。非常に簡単です。心のうちに神の

光をあてていく。そこになにがあるかをいつも吟味していく。そこに主の助けをいただきながら、この方とともにまた歩んでまいります。